

「一滴の貴重さ実感」

秋晴れとなった19日、漆の木から樹液を採取する「漆掻き」の体験会が天子町で開かれ、県内外から約10人が参加した。

生産量の減少や後継者不足が深刻な「天子漆」の保全に取り組むNPO法人「麗潤館」（矢崎孝子理事長）が企画し、地元の天子漆保存会（飛田祐造会長）のメンバーが、「腰鎌」「掻き鎌」などの道具の使い方を伝授した。

天子で漆掻き体験会

漆は1本の木から100〜200gほどしか取れないといい、参加者は等間隔に付けた傷から染み出した白い樹液を、こぼれないように丁寧に掻き取った（写真（緒方優子撮影））。

相模原市の乾漆彫刻家、江村忠彦さん（30）は「漆が職人の手で一滴一滴採取されている貴重なものだ」と実感した」と話していた。

